

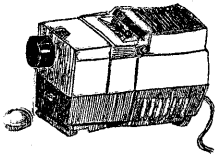
兵庫県農業総合センターの巻

誌名	農業技術
ISSN	03888479
著者	小川, 寿照
巻/号	32巻3号
掲載ページ	p. 132-133
発行年月	1977年3月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council
Secretariat



兵庫県農業総合センターの巻



(試験場・研究所めぐり 123)

天さかるひなのなが路ゆ恋くれば

あかしの門よりやまとしまみゆ 柿本人磨呂

兵庫県明石市、万葉の昔から歌に詠まれ、源氏物語にも名高い風光明媚な街、山陽道の要衝として栄えた歴史と文化を残す街、近代化された町並み、明石はそんなところである。また、子午線のまち（東経135度）であり、文字通り日本の中心である。

山陽本線国鉄明石駅をおりと、北側に濠にかこまれた県立明石公園がある。明治維新まで、松平家8万石の城跡である。二つの櫓が古城の面影を残し、白と緑のコントラストが大へんに美しい。自然環境に恵まれた公園には、完備された各種スポーツ施設があり、緑と水に憩う場、スポーツに年間約64万人の人に利用されている。

本丸跡よりは、明石海峡をへだてて、花とミルクとオレンジの島、多毛作を代表する淡路島が目前にあり、しげく行きかう船などの景観はすばらしい。

兵庫県農業総合センターは、明石駅の西北2km、車で約5～6分のところに農業試験場と併置されている。

農事試験場が今の場所（明石市北王子町365）に創立されたのは、明治27年4月、爾来83年間この位置において、多くの試験研究の業績を収め、兵庫県農業の振興に大きな原動力となったばかりでなく、日本農業の発展に大きな役割を果たしてきている。

近時においても、水稻の良質、多収品種として「農林8号」、酒米「山田錦」を生み、続いて病害に強い良質品種として「農林22号」を育成、さらに多収穫品種として「はりま」を生みだした。野菜についても、ナスの一代交配種「播磨」を育成し、さらに放射線によるレタスの新品種として、「エバークリーン」を育成し、本県における夏期レタスの栽培を可能とした。イチゴでは耐病性早生品種として「宝交早生」を作出し、今や日本イチゴの代表品種に発展している。そのほか、果樹ではブドウにおけるマスカット・ベリーAのジベリレン処理技術、花きのカーネーション茎頂培養技術の確立等の多くの新技術開発の実績をもって、本県農業の発展に大きな貢献をしてきた。

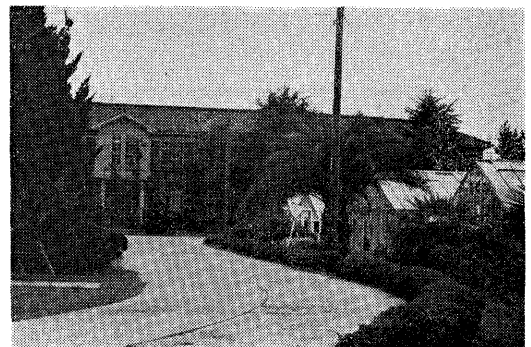
昭和50年4月、県の機構改革により、兵庫県農業総合

センターがここに新設された。これは活力ある農政を推進するため、その原動力となる試験研究、普及、教育関係を統合して、農業技術のメッカとしての役割を果たし、総合的に農業振興の推進力たらしめようとする目的のためである。

農業総合センターの組織は、事務局、農業試験場、農業大学校とこれに農業試験場経営実験部と専門技術員を主体とした普及部より経営実験場の四つの機関よりなっている。職員の総数は197人である。なお、経営実験場と農業大学校は神戸市垂水区神出町にある（国鉄明石駅から三木行バス約40分）。

農業総合センターの中核である農業試験場は、総面積14.9ha（敷地等4.8ha、圃場面積10.1ha）、建物は本館のほか、主な研究棟等が10棟余り場内に分散している。

主な研究施設は、アイソトープ研究室、大気汚染関係のライ



シメーター、フィルタードエアーチャンバー施設、無病苗育成温室、組織培養室、総合自動制御温室、花き病害検定室、露地野菜技術研修装置等の近代化施設がある。建物については、今後の総合整備が急がれている。

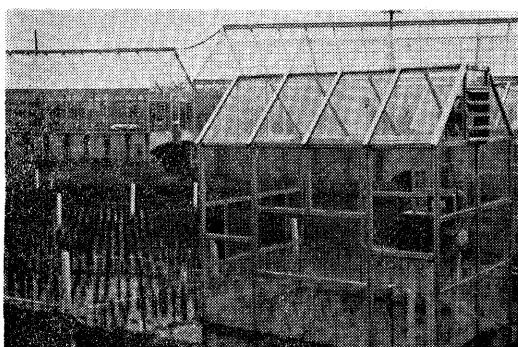
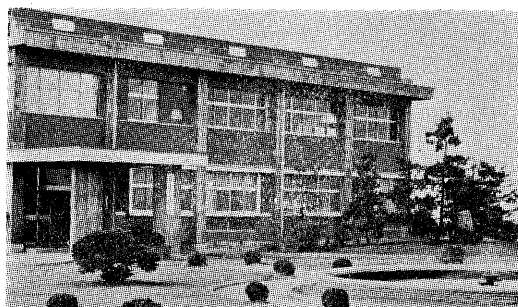
農業試験場は、場長のもとに作物、園芸、化学、病虫、環境保全の5部と、宝塚、但馬、淡路の3分場に加えて原種農場、酒米試験地、梨試験地をもって構成されており、所属職員は研究員78名を含めて計116人である。

兵庫県の農業地域は北は日本海から南は太平洋まで、地域と気象条件の変化に富み、特に、地域の特性に応じた効率的な試験研究が要望され、本場各部と各分場が相互に連絡協調して研究を進めている。本場における主な試験研究項目を紹介すると次のとおりである。

〔作物部〕 稲、麦、雑穀、飼料作物の品種改良と栽培

* 岩田善明農業総合センター所長の近影（上の写真）と農業試験場の本館風景

法に関する試験研究及び種苗の育成配布。①優良品種の育成、選抜と原種生産＝水稲では米の品質向上（食味向上）と灘の生一本の原料である酒米生産に力を入れ、これまでに多くの優良新品種を育成した伝統を受けつぎ、本県に適した、よりよい品種の作出につとめている。また、麦の早熟品種、飼料作物の適正草品種の選定を急いでいる。②水稲、麦、雑穀の多収効率生産＝水稲の直播栽培の研究にいち早く着手し、乾田直播栽培法の基本技術を確立して、県内外にその普及をみているが、さらに不良天候下の播種技術、麦あとの簡易直播法及び湛水直



播法等の新栽培技術の開発試験を進めている。麦、大豆については、今まで得られた技術をもとに、省力多収技術の研究と麦の早熟化技術の確立を急いでいる。そのほか、新除草剤の選出と使用基準の策定等を行なっている。

〔園芸部〕 野菜、花き、果樹の品種改良、栽培法に関する試験研究及び種苗の育成配布。①優良品種の育成と原種生産＝タマネギ F_1 、トマト、イチゴ等の新品種の育成と県内主要野菜、花き、果樹の優良品種の選抜試験。②安定多収技術の確立＝露地栽培の安定と機械化をはかるため、キャベツ、スイカの栽培法の改善、機械化に伴う育苗法の改善、花木栽培におけるコンテナカルチャー法の開発、ジベレリン処理ブドウ（マスカットベリーA）の栽培改善、イチヂクの整枝法改善。施設栽培では、施設果菜栽培における太陽エネルギーの有効な蓄熱

利用、養液栽培改善、環境制御による温室カーネーション花莖品質の改善の研究。③連作障害の要因解明＝イチゴのすくみ症状の解明、トマトのすじぐされ病対策、イチゴ、カーネーションのウイルスフリー株の育成、ブドウ（マスカットベリーA）の無核小果粒発生原因の究明と対策を急いでいる。

〔化学部〕 農作物の栄養生理、肥料、施肥法、アイトープの農業利用、農畜産物の品質、保存、利用加工に関する試験研究。①優良品種の育成と原種の生産＝放射線照射による各種種苗の新品種育成及び貯蔵性の向上。②土地利用の向上と作付の高度化＝水稲種苗培土のうち育苗上の問題点があるものについて改善対策を検討している。③良質、安定多収化技術＝長期にわたる堆肥施用の有無と三要素欠如、不耕起栽培の継続と土壌生産力、稲わら麦わら利用による地力向上効果、ふん尿オガクズ堆肥の連用効果、タマネギの土壌的適地環境実証試験、野菜の簡易栄養診断法等の試験研究。④流通利用と食品安全の技術開発＝タマネギ廃棄物の有効利用、白菜の貯蔵、県内野菜の品質規格化、氷温貯蔵食品の開発試験及び農産物・加工食品の分析調査等を行なっている。

〔病虫部〕 農作物の有害動植物の種類分布、生理生態、防除、農薬、病害虫発生予察の情報提供及び農業気象に関する試験研究。①病虫害防除技術＝ナシカメムシの発生と防除法、タマネギの貯蔵腐敗の防除法、そのほか、園芸作物のウイルス病の診断と防除法、野菜の種子消毒法、イモグサレ線虫によるアイリス球根腐敗防止、ツマグロヨコバイの防除法、施設園芸ハダニ類の防除法、ツツハナバチ類の有効利用等に関する研究がある。②新農薬応用＝各作物の病害虫に対する新薬剤の効果判定、薬害の有無等の実用性の判定、既登録農薬間の効果比較、適用拡大等の試験を進めている。

〔環境保全部〕 農業公害の調査、対策、土地基盤の整備、地力保全、農用地土壌の分類、土壌改良、未利用地開発等に関する試験研究。①ほ場改良技術の開発＝本県耕地土壌の基本的性格を明らかにし、作物栽培の基本である土づくりを推進するため、地力保全基本調査、地力実態調査、農業団地地力増強対策基準設定事業、ほ場整備に伴う土壌調査。②農作物に対する土壌汚染、大気汚染対策＝土壌汚染防止法に基づく農用地土壌の重金属による汚染状況調査と土壌汚染防止対策調査、大気汚染物質による被害軽減対策のための大気汚染による農作物の被害解析、各種産業による農業環境汚染対策のための農業公害対策試験。③農薬残留調査＝農薬安全の確認のための農薬残留対策調査、農薬残留安全追跡調査、農薬土壌残留調査を実施している。（企画調整課長・小川寿照）

* 経営実験場の本館風景（上の写真）とフィールドエアチャンバーによる大気汚染試験（農業試験場）